

大正五年四月十九日

一九一六 四一九

原アリ之ヲ千里ガ濱ト云フ、先ヅ火口原トモ稱スベキ地ナリ此千里ケ濱ニ面シタル火口丘ノ斜面約二十度計リノ地ニシテ火口ヨリ遠カラザル處ニ新火口ヲ生ジタリ、偏圓形ニシテ長サ四間幅一間半計リナリ其噴出ノ初メハ其大サ遙ニ小ナリシガ次第ニ擴大シテ此ニ至レルナリ。噴火ノ當時中岳ノ活火口ヲ距ル事五六町ナル茶小屋主人ハ火口ノ方ニ向テ大ナル響ヲナシテ噴出セルモノアルヲ聞ケリ、此音響ハ餘リ大ナラズシテ、二三里ヲ離レタル山下ノ人家ニテハ一モ轟音ヲ聞カザリシト云フ、此時ハ多少ノ降灰アリシナルベキモ前記小屋ニハ一モ飛ビ來ラザリキ。(地質學雜誌岩崎理士學)

鳴動降灰ス。(大正五年四月二十日東京朝日新聞)

### 第三十九表 霧島山噴火

年月日

同上 (西曆)

記事

天平十四年十一月二十三日

七四二年 十一月二十八日

十一月壬子大隅國司言、從今月二十三日未時、至二十八日空中有聲

如太鼓、野雉相驚地大震動、丙寅遣使於大隅國檢問并請聞神命。(續日本紀)

延曆七年三月四日

七八八 四一八

七月己酉太宰府言、去三月四日戌時、當大隅國贈於郡曾乃峯上火炎大熾、響如雷動、及亥時火光稍止、唯見黑煙、然後雨沙、峯下五六里沙

石委積可三二尺其色黑焉。(續日本紀)

年月日

同上 (西曆)

記事

承和四年(西曆八百三十七年)秋八月日向都農妻江田霧島四神、預<sub>二</sub>官社<sub>一</sub>。  
(國史紀事本末)

承和十年(西曆八百四十三年)九月甲辰、日向國無位高智保皇神、奉<sub>レ</sub>授<sub>二</sub>從五位下<sub>一</sub>。  
(續日本後紀)

天安元年(西曆八百五十七年)六月甲申、在<sub>二</sub>肥後國<sub>一</sub>從五位上曾男神、授<sub>二</sub>正五位下<sub>一</sub>。  
(類聚國史)

天安二年(西曆八百五十八年)十月二十二日、授<sub>二</sub>日向國從五位上高智保神從四位上<sub>一</sub>。  
(三代實錄)

霧島山噴火。(地學協會報告)襲山考曰今按<sub>二</sub>緣紀及<sub>レ</sub>僧性空傳平家物語等<sub>一</sub>天慶八年性空<sub>二</sub>抽<sub>二</sub>丹悃<sub>一</sub>欲<sub>レ</sub>登<sub>二</sub>絕頂<sub>一</sub>誦<sub>二</sub>法華經<sub>一</sub>限<sub>二</sub>以<sub>二</sub>七日<sub>一</sub>受<sub>二</sub>之神勅<sub>一</sub>而居五日闔山震動猛火大發不可<sub>レ</sub>暫止。  
(福島殿之助編纂 鹿兒島縣噴火書類)

西峯發火。(三國名勝圖會)噴火ス。(地理纂考)霧島山大曼陀羅院西生寺ハ梅北村益貫ニアリ、始メ小松

内府平重盛ガ霧島山ノ東麓佐野ニ寺ヲ建立シテ霧島山西生寺ト號シタリシガ其後住持尋譽上人ガ時、一夜神童來リ告テ曰ク、三日ヲ歷テ霧島山

ニ火起リ寺院回祿ニ罹ルベシ、速カニ三里ノ外ニ退ケト、於是僧侶當時ノ本尊及ビ鎮守山王等ヲ奉ジテ今ノ地梅北ニ移ル果シテ霧島山ニ火起リ

殿堂燒崩スハ實ニ仁安二年ナリ。  
(三國名勝圖會)

霧島山噴火。  
(ミルン氏調査)

天慶八年

九四五<sub>年</sub> | 月 | 日

天永三年二月三日

一一二二 | 三九

仁安二年

一一六七 | |

壽永二年十二月十七日

一一八四 | 二七

文曆元年十二月二十八日

一二三五 一二五

發火甚ダ盛ニシテ祠宇皆燒盡ス。(三國名勝圖會) 西御在所霧島六所權現社即チ

霧島宮ハ田口村霧島山西面ノ半腹ニアリ、欽明天皇ノ頃ニ創建セリト云

ヒ傳フ、後山上火ヲ發シ(延曆七年七月ノ火トスルノ説アリ) 寺社燒亡シテ多クノ星霜ヲ經タ

リ、初メ上古ノ神社ハ今ノ社地ヨリ東一里十町許ニ當ル當山ノ巔矛峯ト

火常峯(西峯)トノ中間、脊門丘ニアリシガ、天曆中性空脊門丘ヨリ今ノ

地ニ神社ヲ遷シ六所權現ト號ス、其レヨリ凡二百八十年ヲ經テ文曆元年

甲子十二月二十八日山上又火ヲ發シテ神社寺院及ビ什寶文書等悉ク燒失

ス、其後二百五十年許ノ間ハ神社寺院共ニ廢シテ唯假宮アリ。文明十六

年甲辰兼慶法印往古ノ社地ヲ求得テ神廟ヲ建立シ六所權現ヲ遷宮シ、往

古ノ莊麗ニ復レリ、即今ノ地ハ村上天皇ノ時、性空ガ神社ヲ遷徙セル處ナ

リ、神廟脊門丘ニ在リシ時ハ高千穗神社ト稱セシナランカト云フ。(三國名勝圖會)

霧島山噴火。(地學協會報告)

(地學協會報告)

天文二十三年ヨリ翌弘治元年ニ至リテ燃ユ。(三國名勝圖會)

火ヲ發シテ人多ク焚死ス。(同上)

霧島神火天地震動ス。(玉龍山續年代記)

天正四年ヨリ同六年ニ至リ又燃ユ。(三國名勝圖會)

霧島山震動噴火。(地學協會報告) (一説ニ天正十三年十月七日ヨリ大地震年ヲ逾

ユトアリ)

霧島ノ神火震動シ黑煙ノ上ニ白雲翳キ一日ニ三度巍々敷ク立ツ。(福島殿之助編纂鹿

兒島縣噴火書類)

大永四年

一五二四

天文二十三年

一五五四

永祿九年九月九日

一五六六 一〇三一

天正二年正月

一五七四 二

同 四年

一五七六

同 十三年

一五八五

同 十五年四月十七日

一五八七 五二四

年月日	同上 (西曆)	記事
天正十六年三月十二日	一五八八 <sup>年</sup> 四 <sup>月</sup> 七 <sup>日</sup>	霧島山神火ヲ發シ申酉ノ間大地震。(上)同
慶長三年	一五九八	慶長三年ヨリ五年ニ至リ又燃ユ。(三國名)勝圖會
元和三年	一六一七	元和三年ヨリ翌年ニ至テ又燃ユ。(上)同
萬治二年正月	一六五九	萬治二年正月ヨリ寛文元年ニ至テ又燃ユ。(上)同
延寶五年	一六七七	霧島山神火起。(福島殿之助編纂)鹿兒島縣噴火書類
同 六年正月九日	一六七八	霧島山神火起。(上)同
寶永二年十二月十五日	一七〇六	山上ニ火ヲ發シテ神社(六所權)堂塔寺家皆焦土トナル。(上)同
享保元年二月十八日	一七二六	夜霧島山ノ内小林曾於郡境笈掛嶽ノ北金剛界胎藏界兩部池ノ邊新燃ニケ所燃出ル依之小林邊震動高原ノ内花堂松八重川水増魚死流。(三國名)勝圖會
同 元年九月二十六日	一七一六	九月二十六日夜半頃ヨリ霧島ノ西嶽震動シテ周圍三里半程處々ニ噴火破裂シ爲メニ其ノ地内ニ在ル所ノ山林及ビ神社佛院等ハ悉ク燒失シ其ノ他災害ヲ被リシモノ砂石入ノ外城(外城トハ一ヶ郷ヲ云フ)十二燒失シ此ノ家數六百軒(或六百)負傷三十一人、斃死ノ半馬四百五頭、田畑六千二百四十町八段六畝十九步、此農産高六萬六千八百八十二石餘、其後三四年ノ間灰下リテ恰モ春霞ノ如クナリシト云フ。(日本災異志ニヨル、損害統計ハ)「此時高原狹野社、神徳院、霧島東御在所社、錫杖院、小林霧島中央宮、瀬戸尾寺及ビ高原、高崎、小林等民家山林皆焚タリ、一書ニ東霧島社モ此火ニ燒タリトス、東霧島社ハ高城ニアリ。(三國名)勝圖會
	一一九	霧島山兩部池ノ邊新ニ大ニ燃出ル高原東霧島神社狹野權現ノ社神徳院寺

同 元年十二月二十六日

一七二七 二二七

同 二年一月三日

一七二七 二二三

中門前並高原野町小林瀬戸尾權現ノ社並ニ別當寺悉ク燒失小林山九狩倉燒失高原高崎邊石灰ニテ田畠多ク降埋ム」東霧島社狹野神體ハ守出シ瀬戸尾社神體ハ後日燒跡ヨリ掘出ス今曉福山町ノ者共男女十一人瀬戸尾ハ致參籠處ニ山中大燃ニ付五人ハ燒死、六人ハ漸助命翌朝花堂迄下向候旨小林ヨリ申出ル。(同)

霧島山新燃今日ヨリ二十九日迄四日相續大燃高原高崎庄内高城穆佐都之城小林倉岡綾高岡須本野尻邊迄石灰降田畠大分損失人馬及ニ死失。(福島縣噴火書類)十二月二十六日復々火アリ。(日本災異志)

正月三日霧島山新燃又々大燃有之此以後七日ヨリ十一日迄打續大燃彼邊火石ニテ家屋燒失錫杖院寺家不殘燒亡田畠石灰ニテ降埋牛馬過分死失高原高崎兩所役人共迄方々ハ引越居候」舊臘二十六日ヨリ當正月十一日迄度々大燃日向國諸縣郡ノ内諸所損失致左ノ通

田畠十三萬六千三百坪餘」石砂灰入高三萬七千九百五十石餘」雜穀千五百四十石餘」堂社十一宇、寺家三十軒、寺門前五十三軒、社家二十六町百姓十四軒、死人男一人、怪我人三十人、死牛馬四百二十疋。(福島縣之助編纂鹿兒島縣噴火書類)

日向國霧島山、去年九月ヨリ燒出シ震動相止不申候處、舊臘二十八日、九日兩夜、夥鋪震動、同國御代官所那珂郡、諸縣郡十三ヶ村、高一萬石餘之處、霧島山ヨリハ道路十里餘有之所ハ燒灰砂利段々降り、當正月三日ノ朝五ツ半時ヨリ九ツ時迄ニ、大地震、砂交リ燒石降り積候處、田畑

年月日

同上 (西曆)

記事

麥作菜園埋ル事四五寸、七八寸、悉砂地トナリ、御代官室七郎左衛門ヨリ注進有之候。(承寛 棟録)

享保二酉年三日辰ノ刻頃ヨリ中天夜陰ノ如ク闇ニ成ル、但東西南北ノ麓ハ晴天、島中郷里家々ノ内暫クノ内闇シ、同月七日大地震、同十日申酉ノ間ヨリ小雨ノ如ク白キ砂降ル。(八丈嶼 年表)

按ズルニ正月三日八丈島ニ於テ闇ニ成リタルハ、霧島噴火ノ細微ナル灰ガ疾風ニ吹キ送ラレテ八丈島ニ落チタルナルベシ、同月十日小雨ノ如キ白キ砂ガ申酉ノ間ヨリ降ルトアルモ、同ジク霧島山ヨリ來リシナランカ、霧島山ハ八丈ヨリハ西南西、即チ申酉ニ當ルナリ

正月七日又燃ユ、俗ニ兩郡嶽新燃トイフ、諸縣郡諸邑田園、前後被災者十三萬六千三百餘區トイフ。(三國名 勝圖會)  
大噴火、土灰頻ニ飛ビ近郷ノ田ヲ埋ムルコト數十里。(日本災 異志)

享保二年八月十五日

一七一七年 九月一日

明和八年ヨリ翌年ニ至テ又燃ユ、凡享保元年ヨリ是歲ニ至リ大ニ火テ屢

熾ナリ、燒石焰トナリテ虚空ヨリ隕チ、沙石糠ヲ簸ルガ如ク、灰燼雨テ晝モ夜ニ異ナラズ、行人筵席ヲ戴テ其壓傷ヲ遮リ防ギケリ、數里ノ間、田疇ヲ埋没シ、草木焦枯ル。(三國名 勝圖會)

噴火。(今村理學博士 ノ調査ニヨル)

御鉢近來ノ噴火ニ就キ其ノ大要ヲ摘スレバ、明治十三年九月頃マデ極メ

テ靜穩ナル景況ニアリシニ同月俄然爆發セシヨリ爾後活動ノ状態ヲ絶タ

文政四年十二月二十日

一八二二 一一二  
一八八〇 九

明治十三年九月

同 二十年五月

一八八七 五 |

同 二十一年二月二十一日

一八八八 二二一

同 二十二年十二月十八日

一八八九 一二二  
一八〇

ズシテ蒸汽硫煙ノ噴出次第ニ其勢ヲ増シ噴火孔内ニ夥シク硫黄ノ堆積ヲ見ルニ及ビ争フテ之ガ探堀ニ従事スルニ至リタルモ明治二十二年十二月ノ爆裂ニヨリ硫黄ノ堆積ハ孔外ニ飛散シテ跡ヲ留メズ。(地學雜誌山 上理學士)

噴火。(今村理學博 士ニヨル)

噴火、一晝夜三四回鳴動シ、噴煙天ヲ蔽ヒ飛灰四五里ニ及ブ五月九日噴火。(日本山 嶽志)明治二十一年ノ秋余ノ九州巡回ノ際適々鹿兒島ニ於テ一週間滯在中旅舎ヨリシテ毎日午後噴煙ノ狀況ヲ遠望スルノ好機ヲ得、殆ド毎二時間ノ定期ニ噴煙シ其狀實ニ莊嚴氣煙ニ混ジテ噴灰ノ中天ニ聳ユル所ハ恰モ巨大ナル噴水ヲ見ルガ如クナリキ。(地質要報マキス フニスカ氏記事)

御鉢ト唱フルハ明治十七八年ノ頃ヨリ漸ク噴火ノ勢ヲ増シ同二十一年二月頃ニ至リテハ鳴動噴火甚シク實ニ容易ナラザル形狀ナリシ然レドモ爾來其勢ヲ殺キ一日一回乃至二回ノ噴煙ヲ見ル位ナリシガ去月十日午前一時頃突然大ニ噴火シ其響激雷ノ如ク黑煙忽チ天ニ漲リ噴出スル所ノ火石遙ニ中天ニ上リ昇降ノ際互ニ打合ヒ或ハ飛散シ或ハ破裂スル等其狀宛モ煙火ノ如ク散亂シタル火石ハ降積シタル硫黄灰ニ燃移リ延燒熾ニシテ殆ド野火ニ異ナラザルノ奇觀ヲ呈シ其降灰ハ遠ク數里ニ及ビ噴煙甚シク灰ヲ降ラシ砂礫ヲ飛スコト晝夜七八回ニ及ビシガ就中同十八日午後零時三十分頃ヨリノ噴火ハ鳴動、發火、噴煙共ニ一層甚シク天色忽チ朦朧ニ變ジ降灰ノ地上ニ堆積スルコト殆ド二三分ニ至レリ、然ル處幸ニ西風起リ爲ニ同村ニ於テハ其害ヲ免レタリシモ西諸縣郡高原村ノ如キハ該風吹靡

年月日

同上(西曆)

記事

明治二十四年六月十九日

一八九一年六月十九日

キ黒煙天ニ漲リ爲ニ晴朗ノ天俄ニ暗黒トナリ白晝途ヲ失ヒ燭ヲ照シテ逃走スルモノアリ、爾後晝夜鳴動噴煙止ズト雖モ別ニ甚シキ異狀ヲ認メズ。  
(鹿兒島縣報告明治二十三年一月二十三日官報)

十九日頃ヨリ非常ニ噴火シ晝夜鳴動劇シク今尙ホ歇マズ。(官報)十九日頃ヨリ非常ニ噴火シ一晝夜凡十四回鳴動劇烈ニシテ黒煙ヲ發シ、噴氣熾ナルニ至リテハ石ヲ飛バシ灰ヲ降ラス等ノ異狀ヲ呈シ山麓一里内外ハ草木等ノ葉ヲ枯凋セシメタリ。(地學雜誌第三集)十一月十日頃ヨリ晝夜十四五回ツ、非常ニ噴火鳴動黒煙ヲ發揚シ近傍一里内外ニ灰ヲ降ラシ所々草木ノ葉ヲ凋枯セシ箇所アリ、同二十日頃ヨリ漸々噴火鳴動トモ減却セリ。(地學雜誌第三集)

同 二十七年二月  
(三十五日 三十八日)

一八九四年二月二十八日

二月二十五日噴火ス、霧島山麓或部分ニ於テハ同日鳴動前怪シキ音響ヲ聞キシガ午前十時三十分爆發シ、黒煙ハ東方ニ向テ流散シ當宮崎地方ニ降灰セリ、西諸縣郡高原村大字蒲牟田字拔川(霧島東麓)ニ於テハ灰ト共ニ大豆大ノ小石ヲ降ラシタリ。翌二十六日午前八時二十分鳴動ス、其翌日ハ前回ニ比スレバ小ニシテ唯其噴煙ノ稍々平常ニ比シテ増シタルノミ。今廿八日午前七時五十一分又鳴動セリ、其響前ニ比シテ稍々大ナリ、當地方少コシク灰ヲ降ラセタリ。(宮崎縣廳報告)

霧島山鳴動ノ餘響ナランカ三月五日鹿兒島市ニテモ幾度トナク遠地鳴動ヲ聞ケリ。(明治二十七年三月六日鹿兒島新聞)

二月二十五日午前十時三十分鳴動ス、十一時三十七分ヨリ同五十七分迄



同 二十八年七月十六日

一八九五 七一六

同 二十八年十月十六日

一八九五 一〇一六

デ二十分間焼砂ヲ降ラス、幅一尺七寸八分、長二尺四寸八分ノ紙(宮崎新報)ヲ以テ受ケタルニ重サ三分アリ、即チ一坪ニ二匁三分ノ割ナリ。(宮崎測候所報告)

十六日午後零時三十分鳴動劇シク黒煙ヲ噴出ス。(宮崎縣廳電報)

十六日午後零時二十六分十六秒霧島嶽非常ノ音響ヲ以テ破裂セリ。(鹿兒島縣廳及ヒ同測候所電報)

午後零時三十分噴火。鹿兒島市ニテハ轟然タル爆音ヲ聞キ黒煙ヲ望ミタリ、四五日前ヨリ噴煙殊ニ盛ニシテ時々鳴動サヘ聞コヘタリキ。都城ニテハ爆音強ク山麓ニハ燒石落ちテ一面ニ煙立テリ。小林ニテハ大鳴動アリ家屋建物動搖黒煙強ク全村ヲ暗ラマシ灰煙ヲ降ラス、山ノ根ニテハ燒石落下ノ爲メ家屋二十二軒出火セリ。(明治二十八年十月十七日鹿兒島新聞)

爆發口ナル御鉢ノ附近約二三丁ノ邊ニテ此ノ噴火ニ遭遇セル三人連ノ男子及ビ一名ノ老女ハ何レモ墜石ニ打レテ慘死セリ。爆發ノ當日鹿兒島市ニテハ強大ナル爆音ヲ聞キタルモ霧島ノ麓(鹿兒島縣方面ナルベシ)ハ之ニ反シテ少シモ震動ノ音ヲ聞カズ只ガチノト奇異ノ響ヲナシタルノミニテ、灰ハ甚シク降下セリト云フ。(明治二十八年十月二十五日國會)

高原村ニテハ黒煙中天ヲ通過シタルモ降灰更ニナク、小林村モ山部ニ添ヘル處ノミニシテ作物ニ被害ナシ。(明治二十八年十一月九日宮崎新聞)

破裂ノ時刻ハ鹿兒島測候所ノ公報ニヨレバ十月十六日午後零時二十六分十六秒ナリ、降灰ハ僅ニ四近山林ノ梢頭ヲ掩ヒタルニ過ギズシテ植物ノ害ヲナスニ至ラザリシ、日向西諸縣郡小林近傍ニ亘リテ多少ノ降灰アリ

年月日

同上 (西曆)

記事

明治二十八年十二月十八日

一八九五年 一月 十八日

大隅國西贈喚郡田口ニハ著シキ降量ナシト云ヘリ小林ハ火孔ヲ去ルコト北四里強ニシテ田口ハ破裂地ヲ距ルコト南西僅ニ二里弱ナリ噴出ノ岩塊ハ其數頗ル夥多ニシテ其大サハ長徑二米突ニ及ブモノアリ是等夥多ノ岩塊ハ噴出ノ勢ニヨリ西方ニ位スル中嶽ノ側面ニ向テ無數ノ圓錐形小孔ヲ穿チタリ其最モ遠キニ達シタルモノハ噴火孔ヲ去ルコト約二基米突ノ地ニ存セリ而シテ是等ノ圓孔ハ御鉢ヨリ西方ニ當ルノ地ニ最モ多ク其他ノ方面ニハ極メテ少ナカリキ。(地學雜誌山 上理學士)

十二月十八日午後三時三十分頃一大鳴動ヲ發シ黑煙天ヲ衝キ家屋ノ反響亦タ甚シク燒石ハ同山ノ東麓ニ飛散セシモ枯草ノ燒失セル外人畜其他被害ヲ見ズ灰煙ハ東方ニ吹キ送ラレ都城地方ハ硫黃臭ノ降灰頻リニシテ面ヲ向クベカラズ又南那珂郡飢肥邊モ降灰アリ延テ同二十一日午後一時十五分再ビ鳴動噴煙甚ダシク山間村落ハ一時咫尺ヲ辨ズベカラザルニ至レリ然レドモ亦幸ニシテ害ヲ被リタルモノ無カリシト云フ。(地學雜誌)

在宮崎縣某氏ヨリノ通信……一舊臘十八日午後三時十五分頃富士旅舎ニテ休息中ニ非常ナル鳴響ヲ相感ジ申候一時間程ヲ經テ霧島岳ノ方向ニ當ル空中ニ黑煙ヲ見受申候、然ルニ又去ル二十一日鶴戶村烏帽子峠ノ上ニテ測點建設中ニ轟然一發其後凡ソ三十分間ヲ經テ同所迄ニ降灰帽子外套ヘハ勿論眼中ヘモ何分カ風ノ爲メ吹キ入ル位ニ有之候尤モ此日ハ西風烈敷同所海上迄モ及ボシ候様子ナリシ前日ノ分ハ飢肥村内ヘモ現然降

同 二十九年三月十五日	一八九六 三一五	灰アリシ由ニ御座候此日ハ風向ハ北西ナリシナラン」(同上)
同 二十九年六月二十二日	一八九六 六二二	午後三時四十五分鳴動噴煙ス、宮崎ニテモ振動ヲ感ズ。(明治二十八年十二月二十日東京日々新聞)
同 二十九年六月二十六日	一八九六 六二六	午前八時二十六分爆發シ、偶々登山セル佛國海軍大主計「リエール」氏ハ降石ニ打タレテ負傷シ、案内者吉松某ハ慘死セリ。(明治二十九年三月十二日大阪朝日新聞)
同 二十九年十二月廿一日	一八九六 一二二	夜十二時頃ヨリ鳴動、降灰ス。(地質學雜誌)
同 三十年五月三日	一八九七 五三	宮崎ニテハ前夜十二時頃少コシク鳴動シ當日午前一時過ギニハ爆音ヲ聞キタリ、降灰セリ。(明治二十九年六月三十日大阪朝日新聞)
同 三十年六月二十五日	一八九七 六二五	去ル十八日噴火シタル霧島山ハ二十一日午後一時十五分再ビ爆發シ、黒煙ハ東方ニ靡キ都城附近各村ニハ降灰アリタリ。(明治二十九年十二月廿九日報知新聞)
同 三十年九月四日	一八九七 九四	鳴動噴煙シ、都城地方ニ降灰アリ、茶葉及ビ桑樹ニ多少ノ損害ヲ與ヘタリ。(明治三十年五月十日東京朝日新聞)
同 三十一年二月八日	一八九八 二八	鹿兒島市ニテハ十二時頃小雨ニ交リテ微量ノ降灰アリ、霧島山ノ噴灰ヲ送り來レルナルベシ。(明治三十年六月二十七日鹿兒島新聞)
同 三十一年三月十一日	一八九八 三一一	午後八時噴出約十分間繼續シ多少燒石ヲ散落セリ。(明治三十年九月十日東京朝日新聞)
		午前一時鳴動噴煙、降灰アリ燒石飛散ス、同一時三十分頃再ビ鳴動ス。(明治三十一年二月十一日鹿兒島新聞)
		午後六時二十分頃噴火鳴動シ燒石ヲ數町ノ間ニ飛散ス、震動凡ソ五分間ナリ。(震災豫防調査會報告第二十九號)
		午後七時轟發シ宮崎ニテハ戸障子振動シ、天色濛々トシテ降灰アリ。(明治三十一年三月廿日佐賀自由新聞)

年月日

同上(西曆)

記事

明治三十一年十二月廿六日

一八九八年十二月二十六日

乃至三十日

十二月三十日夜十一時頃大ニ鳴動シ宮崎ニテハ降灰アリ宛モ雪ノ積ミタルガ如クナレリ。數日前モ大ニ鳴動セルコトアリキ。(明治三十二年一月一日宮崎新報)  
松山市ニテ十二月二十七日午前二時前後ニ遠雷ノ如キ異響三回聞ヘタルガ北宇和郡明治村及吉野生村附近ニテハ翌二十八日朝山野ノ別ナク一體ニ灰降り居ルヲ發見セリ。(明治三十二年一月八日松山市愛媛新聞)

同 三十二年七月二十八日

一八九九年 七月二十八日

高知市ニテ十二月二十六日降灰アリ、……又タ十二月末ヨリ土佐國ニテ數回ノ小地震(氣振ナランカ)ヲ感ズ。(明治卅二年一月八日高知日報)  
午前一時三十分頃遠雷ノ如キ鳴動劇シク山麓ノ家屋ハ震撼セリ、黑煙ヲ噴出ス。(明治三十二年八月七日東京朝日新聞)

同 三十二年九月十二日

一八九九年 九月十二日

午前鳴動シ宮崎ニ降灰セリ。(明治三十二年九月十三日時事新報)  
午前三時五分頃鳴動シ火煙ヲ噴出ス、黑煙ハ漸次東方ニ向ツテ消散シ、

同 三十二年十月十三日

一八九九年 十月十三日

鳴動ハ巨大ナル砲聲ノ如ク次第ニ遠雷ノ如クナリ約二分間繼續セリ。(明治三十二年十月十五日宮崎新報)

同 三十二年十一月七日

一八九九年 十一月七日

朝鳴動シ宮崎ニ降灰アリ。(明治三十二年十一月八日大阪毎日新聞)  
午前九時頃噴火ス、當時狩獵ノ爲メ飼犬七頭ヲ牽キ連レ霧島山西南山腹

同 三十三年二月十六日

一九〇〇年 二月十六日

字大尾ノ谷ト稱スル所ニ至レル五名ノ者ハ此爆發ニ遭遇シ五名トモ重傷ヲ蒙リ内二名ハ後遂ニ死亡セリ同所ハ噴火口ヲ距ル僅ニ八百間乃至千間

同 三十六年八月廿九日

一九〇三年 八月二十九日

ナリ。(明治三十三年二月二十四日鹿兒島新聞)  
爆發シ、加久藤ニテハ強キ鳴動ヲ聞ク。(明治三十六年九月一日九州日日新聞)

同 三十六年十一月廿五日

一九〇三・一一・二五

午後八時二十五分頃爆發ス、宮崎町ニテモ家屋振動セリ。(明治三十六年十一月二十七日大阪毎日新)

今回ノ噴火ハ西岳村字牛ノ驢馬渡尾首山等ニ夥シク灰及砂礫ヲ降下シ、牛ノ驢地籍ニハ拳大ノ降石モアリタリ。(明治三十六年十一月二十九日鹿兒島新聞)

大正二年十一月八日

一九一三・一一・八

大正二年五月十九日午前四時二十分頃西諸縣郡加久藤村ニ地震ヲ感知シ引キ續キテ九月一日迄デニ加久藤眞幸ニテ一百七十五回ノ地震ヲ發シタリ、其後十月十七日ヨリ十九日迄デ三日間ニ三回ノ強震起リシガ、十一月八日午後十一時頃ニ至リテ遂ニ霧島山ノ爆發トナレリ、燒石ヲ噴出ス狭野(高原村)、西麓(高原村)、小林ニテハ遠雷ノ如キ音響ヲ聞キ、少コシク降灰セリ、野尻、飯野ニテハ音響アリシモ降灰セザリキ、加久藤ニテハ音響ト共ニ噴口上ニ火柱ヲ認メタリ、少コシク降灰ス、眞幸ハ異常ナシ」加久藤及ビ眞幸ニテハ翌九日午前三時四十分頃ニ強震一回十日午前一時三十分頃ニ微弱震一回ヲ感ジタリ。(宮崎測候所報告ニヨル)

同 二年十二月九日

一九一三・一二・九

午前四時十五分爆發シ降灰宮崎ニ迄デ及ベルモ、強音ヲ聞キ震動アリシハ都城以西ノ山麓ニ近キ區域ニ限り、宮崎ニテハ降灰モ注意ナキモノハ知ルヲ得ズ、熟睡ノモノハ音響ヲ聞知セザリキ。高原ニテハ大砲ノ如キ音響アリ、劇烈ナル震動ヲ起コス、山上火塊ニ充タサレ、三十分ノ後村ノ南西部落ニ微量ノ降灰アリ。狭野ニテハ大ナル爆音ヲ聞キシモ降灰ナシ、噴出セル大小火石高千穂峰及同山腹ニ撒布シテ星ノ如キ光ヲ放テリ西岳村字中ノ山附近ニハ周圍四五寸ノ火石降レリ」本年二回ノ噴火ハ去

年月日

同上 (西曆)

記事

大正三年一月八日

一九一四年一月八日

ル明治三十六年十一月二十五日ノ爆發ニ比シテハ著ルシク輕微ナリキ。  
(宮崎測候所  
報告ニヨル)

午前二時二十分頃爆發ス、宮崎ニテハ前回ニ比シテ爆音比較的強ク稍々長クシテ約二十秒ニ達セリ、戸障子震動セルモ降灰ナカリキ、山麓北諸縣郡西岳村字牛臚方面ニテハ栗實大ノ石ヲ降ラシ、御池ヨリ西方噴火口ニ稍近キ小字赤道ノ一部落ハ屋上ニ落下スル音囂々タリシモ荒襲方面ニハ砂灰共降ラズ、空氣震動ノ波及セザリシハ日向國極北部ノ三田井延岡方面ニシテ、爆音ハ南方全部ヨリ兒湯郡全部ニ達シ田野、都城、鹿兒島縣始良郡東襲山村ニハ降灰ヲ見タリ。(上同)